

島建国建

島コーダ国コーダが島を建設して、島は建設したが地揺れし、土がぐらついで、ここ踏めばかしこ上り、かしこ踏めばここ上り、仕方がないので神に相じた（相談した）。相じた処が神様が言われる。

汝程の島コーダ国コーダ、その位の事が分らなかったのか、

東の岸に黒石置け、西の岸には白石置け。国は建設したが、人間造る事が出来ない。

又神に相じた。神様は、土で仏様のごと造って、息を籠めれば人間が出来る。と言われる。

人間は造ったが、子の出来る方法は如何であろうか。又神様に相じた。神様が言われる。

えげが（男）の家は風上に造れ、女子の家は風下に造れ。

造った処が、風上の男の息が、風下の女の息にかかって、子が出来るようになった。

子が出来るようになったが、食べるものは如何。又

第五節 神話

沖永良部島の神話とも考えられる話が残されているので、それをとりあげて多少の考証を加えてみたい。この神話は、岩倉市郎著「おきのえらぶ昔話」に採録されているもので、岩倉氏が昭和十一年五月に来島し、出花池栄老から語ってもらったものである。

神様に相じた。神様が言われる。

ニラが島（竜宮）で、物種を貰って来て、作らする
ことせよ。

島コーダ国コーダは神様の教えに従いニラが島へ
行った。そうしてニラの大王ウラヌシにお願マカいしたら、初穂
祭をしない故、物種は出されぬ。新祭アヒシをした上で上
げよう。

と言われる。そこで島コーダ国コーダ、
これ程の島コーダ国コーダが来たる上、ただ戻る事
はならじ、

と言つて、田圃の稲の穂を摘み切つて袂たもとに隠し、ニ
ラが島から遁にげり帰つた。そうしてニシントーバルア
メノカタバルという処まで来たら、ニラの神様に追
いつかれ、打倒されて気が遠くなつて死んだ。

一日しても二日経つても、島コーダ国コーダが戻つ
て来ない。天の神様が心配されて、使いを遣つて尋
ねさせた処が、ニシントー原アメノカタ原に、
目こぼれ鼻こぼれして死んでいた。

天の使が薬を飲ませると、島コーダ国コーダは生
返つた。神様は事情を聞かれ、その穂は元に返して、

初、島は船の浮くこと、かしこ踏めばダブダブ、こ
こ踏めばダブダブとぐらつた。それで島コーダ島
テーシが、西の崎に白石、東の崎に黒石を置いて、
島を安定せしめた。国は建てたが、人の種がない。
太陽の神にお願マカいしたら、子の星と午の星を降して
下された。子の星はエケリ（姉妹に対する兄弟）、
午の星はウナリ（兄弟に対する姉妹）である。その
二人の息子が出来た。

この神話は、その内容からみて沖永良部島の創世神話
とみてよいであろう。国土の創造・人の誕生・穀物の入
手などが系統だつて語られている。したがつて、内容的
には古い伝承にもとづいて形成されているとみられる
が、伝承の過程で新しい要素が入りこんでいることも否
定できないであろう。そのうちの古い伝承とみられる部
分には、「古事記」・「日本書紀」などとの類似も指摘
できる。

たとえば、島コーダ国コーダが建設した島は、「地揺
れし、土がぐらついで、ここ踏めばかしこ上り、かしこ
踏めばここ上り」という状態であったというが、これは、

あらためて貰い受けて来るように言われた。島コー
ダ国コーダは再びニラが島へ行つて、盗つてきた穂
を元の稲に接いで、新祭を済ませて後改めて稲穂を
貰つて来た。その稲がこの島に古くからある、アサ
ナツヌヨネゴンダネである。
（五月十九日 出花池栄老）

この話には、次のような補注があるので、ここに付け
加えておきたい。

この話は話者が幼少の頃、さる老翁のユタが唱えて
いたものを、いつとなく覚えたものという。そのユ
タはお竈願カマドガミいという儀にこれを唱したという。沖永
良部島は、東海岸の石は黒く、西海岸の石は白いと
いう、あらまつは旧曆九月十五日に行われる初穂祭。
この祭が終るまでは、新藁で拵つとめた海沓ウミカを穿くこと
はならぬと言われる。

また、「島建国」と類似の話も、次のように採録さ
れている。

島コーダ島テーシが永良部の国を建てた。建てる時
ニラの大王が、東の大潮、西の大潮を干かせた。最

「古事記」が国土のはじめは、「国稚わかく浮きし脂の如く
して、くらげなすただよへる」と表現しているのに似て
いる。また、「東の岸には黒石置け、西の岸には白石置け」
というところで島固めを行っているが、この部分につい
ても、天つ神がイザナギノミコト・イザナミノミコトに、
「このただよへる国をおさめつくり固めなせ」と命じて、
天の沼矛ぬぼこを授けたことに対応している。

次に、子を生み出す方法については、「男の家は風上
に造れ、女子の家は風下に造れ」としているのに対し、
「古事記」の場合は、イザナギノミコト・イザナミノミ
コトの結婚によるものとされてはいるが、話の筋として
は国土創造の次に展開する点では類似している。

さらに次には、「物種」（穀物の種子）の入手の話となつ
ているが、それにはニラの大王の許可が必要であり、初
穂祭を行うことが条件となつていた。「古事記」では五
穀はオホゲツヒメの死体から化成しており、この点では
大いに異なっている。「物種」入手についての叙述には、
沖永良部島創世神話の特色がみられるようである。すな
わち、この神話では、穀物の種子はニラ（ニライカナイ）
からもたらされるものとの観念が強くはたらいっている。

とである。

ニラは、おそらく海のかなたの聖地と考えられており、ニラの神々が人間世界に幸福をもたらし、穀物の種子をもたらすとの考え方は、沖永良部島の人々に浸透していたのであろう。このように、太陽ののぼる水平線のかなたに聖地を求めるのは、沖永良部島を含めて南島に広くみられる思考であり、神々の水平的来臨も、本土の神話にみられる天孫降臨のような神々の垂直的来臨とは対称的である。

初穂祭の重要性もこの神話は指摘しているようである。旧暦九月十五日の祭りということからすれば、初穂祭は収穫祭であろうが、それを新祭ともいうのは穀霊の再生をも祈願してのことであろう。しかし、沖永良部島において稲穂を祭る形での新祭が行われるようになったのは、さほど古い時代ではないようにも思える。

(中村明蔵)

付 大島の開闢神話(「大奄美史」より)

奄美大島の発祥は、祖國日本の開闢と同じく美しい神話に始まっている。神話の伝ふるところによれば、太初この島は波の上に低く漂へる浮島にすぎなかった。この有様を高天原(高は美称、天原はある空間を指す)から俯瞰し給い、不憫に思召されたのが、日の神(天照大神)であった。日の神は一日アマミコ(阿麻弥姑)という女神とシニレク(志仁礼久)という男神と、この二柱の神に詔して、この島を修理せよと宣はせられた。二神は詔のまにまに高天原から降臨されたが、海浪氾濫して未だ島を成さず、東海の浪は西海に打越し、西海の波は東海に打越し居所とするに至らなかつたので、一応昇天し、土石を運び、草木を下して海浪を防ぎ、無数の島嶼を造られた。

後三男二女を生み、長男は天孫子と称し國君の始となり、次男は按司すなわち諸侯の始となり、三男は百姓すなわち庶民の始となり、長女は君々(王宮にあつて祭祀を司る女の神職)の始となり、次女は祝々(地方の神事を司る婦女で、方言でノロクメと称す)の始となつて、

人倫の道がこれより始まつたと。一説によれば、当時の住民は穴居野処して果実を食ひ、禽獣の血を飲み、未だ火食を知らなかつたから、アマミコは島造りの後再び昇天し、五穀の種子を乞ふてこの地に下り、栽培の法を民に教へ、その始て出来たものを以て天神地祇を祭り、また機織や耕作の法も火食の道も併せて授け給ふたと、これは恐らく後から附足した説であろう。口碑によれば、女神アマミコの額の上には瘤があつて、角の如く盛り上つてゐたが、これを人に示さず、常に珍絹を頭に纏ふて隠してゐられた。当時の婦女子はアマミコの徳を慕ひ、それに倣つて珍絹を頭に纏ひ、これを角隠し、又は珍首といった。昔は嘉宴祝祭の時にこれを用ゐたが、今は採樵耕耘の時か八月踊(盆踊)の類の時などに婦女子が被つてゐる。勿論今ではその由来などは全く忘れられてゐるが、遠い祖先の名残を伝ふるゆかしい風習の一つである。かくてシニレク、アマミコの二神は大島を経営してから、暫く経つて、島伝ひ浦伝ひに南下し、琉球を修理し給ふたと伝へられてゐる。琉球のオモロ(神歌)に大島を根の島と歌ひ、大島を祖國として景慕しているのはそのためであろう。